

東日本大震災

宮城県若林地区での救護活動報告

関東労災病院

循環器科副部長 柴田 正行

2011年3月23日、機構本部、東北労災病院を介し宮城県仙台市の避難所で救護活動を行うため、袴田師長補佐、平井看護師、大串薬剤師他事務員1名と仙台に向けて出発した。東北道は緊急車両のみ走行可能な時期であり、震災地に向かうレスキュー隊を乗せた大型バス、自衛隊の車両、救援物資を運ぶトラックが目立った。

東北労災病院に到着後、三浦院長、徳村副院長等と会議を開き、救護活動は約千人の避難者が居る若林区七郷小学校で、24日朝から24時間救護活動を行い、その後は中国労災病院に引き継ぐことを確認した。



翌日早朝に七郷小学校に到着、自衛隊が丁度炊き出しをしている最中であつた。前任の先生から申し送りを受け我々の活動が始まつた。避難している人数は約千人と聞いていたが、震災から約二週間経過しており実際には500人ほどになっていた。しかし、これらの人は荒浜地区という海沿いに住む人たちがほとんどで、家がなくなつたり、近くに避難する親戚がないという人が多いと聞いた。避難場所は体育館が主で、他に二つの教室があり、新学期に向けて教室にいた方々を体育館に移している最中であつた。この避難所は食料品、オムツ、衣類、薬品は充足しており、トイレも小学校のものを使用しているため衛生面は清潔に保たれていた。とは言つても炊き出しの食事は決してお年寄りの方に合うものではなく、長期間に及べば栄養状態は悪化するのとは明らかであつた。

診療は保健室を使用して行い、主訴は感冒症状、不眠、常用薬の不足、消失が主なものであつた。インフルエンザは数名の発症に留まっていたが、熱発を主訴とする患者は明ら

かに増加しており、避難生活による疲労、集団生活による影響と思われた。外来が落ち着いたところで校内、および徒歩数分の場所にある住民センター（避難人数 30 人）や、車で 5 分ほどの蒲町中学（避難人数 250 人）の往診に出かけた。そこでも七郷小学校同様に感冒症状が多く、我々が医療者と分かり血圧を測定してくれと訴える人や、体調や薬について尋ねてくる人や、また、今後の事について話（家も何もなくなり不安だ）をする方がいて、特に平井看護師は地元であり親身になって話に聞き入っていた。往診は仙台市内の病院も各避難所のラウンドを行っており、既に午前中に薬をもらったという方も居られ、カルテがないために不自由に感じることはあった。難しいかもしれないが、ある程度の人数がいる避難所には継続的に、同じ医療チームがフォローするという形がベターと思われた。これに関連して各避難所の状況把握についても宮城県、仙台市、医師会の何処が管轄しているか、どの施設に 24 時間スタッフを配置するかなど、聊か現場は混乱しているようであった。



写真は荒浜地区の写真である。数キロにわたり瓦礫の山が続いている。テレビとは違う、想像を絶する風景である。家族を失った、家財を失った方々の心情、不安は決して我々には理解できない。大変でしたね、という言葉も当然すぎて憚られました。被害を受けた皆様に一日も早く元の生活が戻りますよう、一日も早い復旧を祈ります。またこの現状で頑張っている現地関係者、医療関係者にエールを送り、自分もできる限りの支援を続けていこうと思います。最後に今回救護活動をさせていただくにあたり調所院長、佐藤副院長、並木部長、機構本部の方々には多分のご配慮をいただき感謝いたします。